

メディアリテラシーの育成に探る リスクコミュニケーションの可能性

シンポジスト 笠置わか菜 氏 (福島放送 アナウンサー)

原発事故と向き合う
被災地テレビ局の視点から

伊藤 守 氏 (早稲田大学 教育・総合科学学術院 教授)

原発事故に対するインターネットメディアの
情報の視点から

大矢 英世 氏 (滋賀大学 教育学部 特任講師)

原発事故と生活の安全をめぐる
教育実践の視点から

コメンテーター 小玉 重夫 氏 (東京大学 大学院教育学研究科 教授)

*司会・進行:池 俊介 (早稲田大学) / 大澤克美 (東京学芸大学)

2016年

2月27日(土)

参加費
無料

筑波大学東京キャンパス 文京校舎120号室

13:00	13:30	15:00	15:15	16:45	16:50
受付	開 会 (趣旨説明・発表及び報告・コメント)	シ ン ポ ジ ウ ム 前 半	休 憩	シ ン ポ ジ ウ ム 後 半 (質疑応答・協議・コメント)	閉 会

原発事故で求められた
メディアリテラシーと
市民社会のリスクコミュニケーション

趣旨

リスク社会に生きる私たちにとって、メディアの情報を読み解くメディアリテラシーは、リスクを回避するためにどうするかを判断する上で、すなわち自分たちの安全や安心、権利や福利を守る上で不可欠な資質・能力となっています。メディア利用に見られる格差や障害を視野に入れつつ、今後期待される開かれたリスクコミュニケーションを実現するためにも、またそこで展開される市民参加のコミュニケーションを充実したものとするためにも、公正なメディアと個人々のメディアリテラシーはなくてはならないものといえるでしょう。

未だ収束のめどがたたない福島第一原発事故による放射能汚染では、この問題を伝える各種メディアの機能や特徴を考慮し、発信された情報を活用するメディアリテラシーが広く市民に求められています。そこでは、情報を選択的・批判的に吟味するだけでなく、時間的経過による諸環境の変化を踏まえつつ内容を読み解き、自らの対応を考え続けることが大きな課題となってきました。

情報の発信という面から見ると、原発事故の状況や影響については、企業や行政機関により事実が隠されたり開示が制限された

りすることが多く、難解な内容をわかりやすく伝えるためにも通常以上に丁寧な取材や編集が求められます。また、科学的知見に差異がある場合や、被災者・被災地の現状に配慮を要する場合の情報伝達には、速報性を重視しつつも慎重な判断が求められます。そうした発信者側に課せられた制約や報道に伴う様々な問題を、情報利用者である市民が知ることもメディアリテラシーには必要不可欠です。

このような現実のもと、学校教育、そして社会科・家庭科教育は、市民性の育成や賢い生活者の育成という立場からこの課題にどのように取り組み、放射能汚染とその対策・対応に関する多様なリスクコミュニケーションの実現に貢献していくことができるのでしょうか。

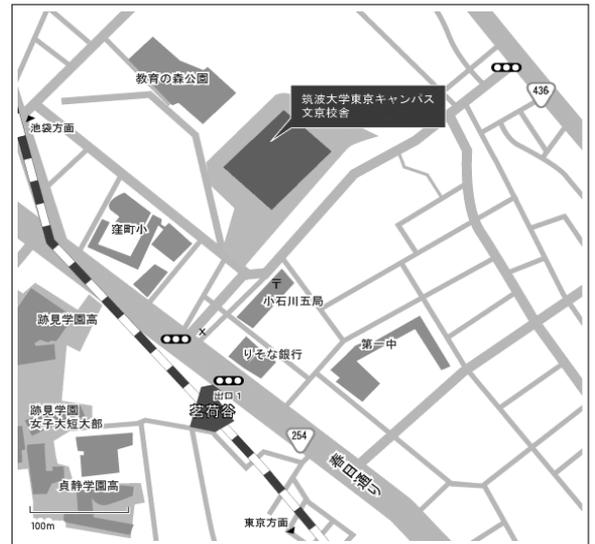
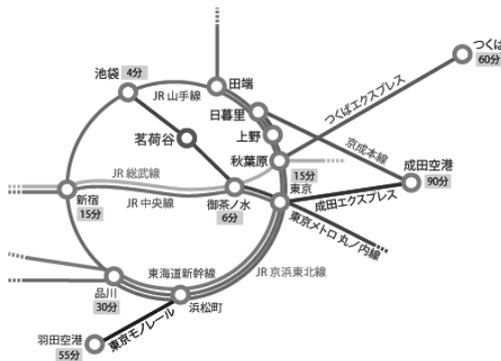
本シンポジウムでは、リスク社会において市民とメディア、さらには多様な専門家が連携して、行政や事業者を含めたリスクコミュニケーションを実現する環境づくりが強く期待されているという理解に立ち、社会科や家庭科がその実現をめざしてどのような教育を展開していくのかについて、メディア関係者、メディア研究者、シティズンシップ教育研究者を招いて議論したいと考えます。

会場へのアクセス

●交通アクセス

東京キャンパス文京校舎へのアクセス・路線図

電車でのアクセス：丸ノ内線茗荷谷（みょうがだに）駅下車「出口1」
徒歩5分程度



●東京キャンパス文京校舎案内 キャンパスマップ

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1

